

令和3年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立 愛宕小学校		NO.	
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
1 学力向上に向けた取組	① 地域から学ぶ「総合的な学習の時間」を軸にした取組 ・ みえスタディ・チェックの結果を活用した授業改善 → 提案授業の実施 6 回 → 児童アンケート「自分の考えや意見を友だちの前で発表している」 低学年80%以上 高学年70%以上 ・ カリキュラム・マネジメントで各教科との連携を図る → 見直し 2 回 ② 家庭学習の定着 ・ 「家庭学習の手引き」改定版を作成，配布し，保護者に啓発 → 6 月に全校配布 ・ 内容：読み・書き・計算，時間：学年×10分 → 懇談会や学年通信で保護者へ啓発 → 児童アンケート「宿題や家での勉強に自分から進んで取り組んでいる」85%以上 「家で勉強する時間」達成 低85% 高70% 以上 ③ 読書活動の推進 ・ 学期初めの火・木曜日の朝学習で読書に取り組む。 → 実施率90% ・ 学年の系統性を考えた学校図書館の活用 → 発達段階に応じたカリキュラムの作成 ・ 図書委員が作ったしおり配布等の活動を通して，来館者の増加 (図書館まつり等のイベントは全面中止) ・ 読み聞かせボランティアによる朝学の時間の読み聞かせ ④ ICT機器を活用した学習活動の促進 ・ chromebook，プロジェクター等ICT機器を活かした学習活動を行う。 ・ 児童が毎日chromebookを活用できる環境にする。→ 週初めにログインし，週末にログアウトする 習慣をつける。 ・ chromebookを使う上でのルールを作り，規範意識をつける。 ・ ICT支援員によるchromebook活用 → 児童への学習支援や授業サポート → 月2日 ・ 情報モラルに関する意識向上 → 高学年に向けて，ICT支援員による情報モラル教育を実施	① 地域から学ぶ「総合的な学習の時間」を軸にした取組 ○受け身の子どもたちが多いということで，対話的授業の必要性，そして子どもたちの主体性を作り出していこうとする取組が分かった。学期初めに行われていた“読書の時間”は，自分たちで考えたり，感情の表し方などが，少なからず，培われたのではないかと。 ○学力向上のために努力していることがよく分かった。成績に関しては，一喜一憂しないで長い目で見守ってほしい。 ② 家庭学習の定着 ○家庭学習の時間はしっかり決めて，その時間は宿題等に取り組む習慣ができていていると思われる。 ③ 読書活動の推進 ○読書をするとう知識が増えるし，新しい世界が見えてくることを教えてやってほしい。 ○読書活動の推進をより活発に実施していただくことを望みます。 ④ ICT機器を活用した学習活動の促進 ○クロムブックでの授業に関しては，子どもたちはすぐに慣れて使いこなせているだろうと思うが，慣れすぎることによる“怖い側面が”あることを継続して指導してほしい。 ○授業を参観して，ICTを使った学習が全学年に広がっていることが理解できた。こうしたことで「授業」そのものの変革が進み，文章から得られる「読み取る力」に重ねてディスプレイ（視覚）を観ることで学ぶステップが上がっているよう。ただ，こうした新しい取り組みは，時として，進捗度に大きな差が出やすいと思います。十分気を付けて大切に進めてほしい。 ○ICT機器を利用した学習は利点もあるが，活字に触れる機会が減ってしまうのではないかと不安もある。 ○「週初めにログイン，週末にログアウト」とのことですが，一週間ログインしたままで，第三者が使用したり，ウイルス感染のリスクが増えるということはないのでしょうか。	①地域から学ぶ「生活科・総合的な学習の時間」を軸とした取組 ○来年度も学調やみえスタを全職員で採点し，自校の課題を自分事として捉えていくようにする。また，全学年で共通した学期末テスト等を購入し，学期ごとに担当学年の強みや弱みを分析し，次の学期の授業改善にいかすようにする。 ○課題となっている対話的な授業については，子どものどのような姿が対話なのか，そのためには指導者のどのような働きかけが必要なのかといったことを，まず教員からしっかりと理解を深めていく必要がある。 ○情勢によるが，生活科・総合的な学習の時間においては，地域教材を効果的に活用していく。 ○学力向上については，朝学習や家庭学習を通して基礎基本の徹底を図ったり，新単元が始まる際等に既習の内容を振り返ったりすることを大切にする。 ②家庭学習の定着 ○自主的に取り組むことができるよう，学年に応じた宿題の出し方の工夫が必要である。宿題の時間については，長ければよいというわけではないので，決められた時間内に集中して質の高い学習ができるように家庭に呼びかけていく。 ○学期に1回程度，家庭学習週間を設定し，子どもや保護者が家庭学習の大切さについて考える機会としたい。その際に，家庭学習チェックシートや自主学習コーナー等を設けることで意欲付けする。 ③ 読書活動の推進 ○子供たちに人気のある本を図書室に多く入れたため，本の貸し出し冊数は増えてきた。朝学習で読書の時間を学期初めに全校で取り組んだり，時間のある時に読書をするように机の横の絵本袋に常時本を入れておくようにしたりして，本に触れる機会は今後も増やしていきたい。図書委員会としても，今後の情勢にもよるが，図書館まつりを年2回持てるようにしていきたい。 ④ ICT機器を活用した学習活動の促進 ○本年度は，一人一台端末の環境に児童はもちろん，教師も「慣れる」ことを意識した取組を実施してきた。児童も教師も慣れてきたが，児童にはICT機器を活用する上での危険性についての認識の甘さを感じる。今後は，端末を扱うことの責任を意識させる情報モラル教育をいっそう進めていく必要がある。 ○端末の利用により，筆記能力の低下が起こらないよう，ノート等を書く活動も十分に確保した上で，情報を共有するツールとしての活用を目指したい。次年度は，端末を活用することを目的とした授業ではなく，端末を効率的に活用し，新指導要領に応じた授業改善を進めていきたい。 ○端末を毎日持ち帰れるようにするためには，セキュリティ面やランドセルが重くなること等，課題がまだ多い。個人のアカウントやパスワードの管理，ログイン後の端末の管理等，学校内でも危機管理体制をしっかりと築いていきたい。
	達成状況及び成果と課題 ①地域から学ぶ「総合的な学習の時間」を軸にした取組 ○全職員でみえスタの採点をし，強みと弱みを分析した。課題をもとにそれぞれの学年で授業改善に取り組んでいる。 ○全学年で研究授業を行い，授業力の向上に努めている。 △みえスタ，学調より，5・6年生はすべての教科において県平均を上回ったが，4年生は学力に課題が見られた。 △意欲的に発表している児童は，低学年では約70%，高学年では約55%となっており，「対話」するということに課題が見られる。 ○年間指導計画は春と冬の2回見直しをした。 ② 家庭学習の定着 ○家庭学習の大切さは保護者に通信等で啓発している。 ○宿題は，目安時間に対して低学年では約64%，高学年では約82%の児童が到達できている。低学年の家庭学習の時間が短い。 ③読書活動の推進 ・ 学期初めの火・木曜日の朝学習で読書をするこは，ほとんどの学級で取り組めた。 ・ 図書館まつりはすることができなかったが，図書委員会でおすすめの本の紹介カードを書いたり，読んでほしい本のポップを作って掲示したりした。 ・ 児童の読みたい本の希望を聞いて，人気のある本を購入することで，来館者が増加した。 ・ 読み聞かせボランティアは，2学期後半から再開し，朝学習の時間に読み聞かせをしてもらい，子どもたちは喜んで聞き，興味を広げることができた。 ④ICT機器を活用した学習活動の促進 ○児童が毎日chromebookを活用できる環境にすることは，ほとんどの学級で週初めにログイン，週末にログアウトの習慣が身につけることができていた。 ○ICT支援員によって，ほとんどの学級が学習支援や授業のサポートを受けることができていた。 △chromebookを活用する上で，chromebook配布前に授業での扱い方やルールについては伝えたが，一部の児童が誤った扱い方をしていたため，再度規範意識の向上を図る手立てを考える必要がある。 △情報モラル教育は，高学年に向けてICT支援員に授業を実施していただいたが，著作権に関する意識や個人情報に関する認識の低さを感じる。今後も継続して指導をしていく必要がある。		

※ ○→達成できている， ▲→達成できなかった・課題が残った

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
2 子どもが 安心して 学べる環境 づくり	①「規範意識」の育成と「基本的生活習慣」の確立 - 重点取組の徹底 → アンケート 「学校のきまりを守っている」 90％以上 「自分からあいさつをする」 92％以上 「すみずみまできれいに掃除をする」 90％以上 「チャイム着席を守る」 100％ - 生活習慣チェックシートの活用 → 本年度は年1回実施 ② 人権教育の推進 - 課題を抱える子どもの現状と指導を共有する → 毎職員会議で報告。年度末に「見守りたい子どもの研修会」「人権教育実践発表会」を実施。 - いじめアンケートにより現状を把握し、解決へ導く → アンケート実施:学期に1回 → 児童アンケート「いじめを見たり、聞いたりしたときにやめるよう言ったり、誰かに伝えることができる」: 90％以上 - 人権の詩を校内に掲示する。 → 月1回程度の間隔で、別の詩を紹介する。 ③ 特別支援教育の推進 「すずかっ子支援ファイル」を活用した、気になる子に係る支援会議を適宜開催する ④ 不登校対策 予防と早期対応 「鈴鹿市不登校対策初期対応マニュアル」とスクールライフサポーターの効果的な活用 → 欠席30日以上:0人, 10～30日未満:10人(昨年度比－4人) ⑤ 健康に関する取組 - 学校・家庭・学校三師が連携した健康教育 → 学校保健委員会:教職員, PTA代表, 校医, 学校運営協議会代表が参加し, 年3回実施 →本年度は、2回実施(1回目:8月4日, 2回目:12月7日, 3回目:3月1日→中止) 学校医, 学校歯科医, 学校薬剤師, 運営協議会会長, PTA会長, 副会長, 保健主事, 養護教諭が参加し、児童の健康状態の特徴について情報共有することができた。引き続き、学期ごとに学校保健委員会を開催し、児童の健康問題の把握・情報共有を図るとともに、家庭、地域、学校が連携して対応していく。	①「規範意識」の育成と「基本的生活習慣の確立」 ○学校からの報告にもあったが、学校として熱心に取り組まれているのが分かった。学校や教室での、ここに対する指導教育だけでは向上しにくい課題であり、愛宕小学校全体の“雰囲気づくり”が大切になってくと思う。まずは先生たちの大きな声と笑顔から。 ○愛宕小出身の鼓中生徒はちゃんとあいさつができている。小学校で習慣化されたからと思われる。うれしいこと。 ○子どもたちの表情が明るく見える。元気な声が聞こえる。 ② 人権教育の推進 ○アンケート結果の「いじめ」の項目内で「理由によっては仕方がない 14％」とあったが、いかなる理由であっても、いじめはいじめである。そのことをしっかり指導してほしい。 ○学年を越えた「縦割り班活動」があればいじめや困っている友達を見逃すことが減ることにつながるのではないかと。常に自分の周りに誰かがいて、孤独にならず、相談できる状況が作られるのではないかと。 ③ 特別支援教育の推進	①「規範意識」の育成と「基本的生活習慣の確立」 ○重点取組については、継続して取り組んでいく。続けることで更なる定着を図る。あいさつ運動にも変化が取り入れられたり、それ以外にも児童の主体的な取り組みを、児童会や各種委員会を中心に展開できる風土を醸成したい。 ○安全指導では、防犯・防災訓練の定期的実施を計画的に進めたい。また、環境整備を進めるとともに、安全を考えた生活改善にも児童が主体的に関われるよう児童会を中心とした活動を促進させたい。 ②人権教育の推進 ○児童が「いじめは、いかなる理由があっても許されるものではない」ことを、年度初めから、繰り返し強く指導する。特に、学級開きにおいては、全学級で指導を行う。 ○新型コロナウイルス感染拡大防止のために、3年前までであった、なかよし学年活動をやめた。感染防止の対策をし、異学年活動をしたり、オンラインでコミュニケーションをとったりする。 ○人権教育の資料を活用し、活用後、全職員に報告する。 ○気になる子(支援の必要な子)について、職員会議で報告し、学校全体で見守る。 ○「子どもレポート」を書き、子どもを一人ひとりしっかり理解できているか振り返るとともに、自分の取組を見直す。 ○校内公開授業を行う。 ○テーマ(部落問題・性的マイノリティ・男女差別等)を決めて、校内研修会を開く。
	達成状況及び成果と課題	④ 不登校対策 予防と早期対応	
	①「規範意識」の育成と「基本的生活習慣の確立」 - あいさつ (高学年) 83.2％ (低学年) 80.6％ 指標数値に到達はしなかったものの、あいさつは元気にできている実感はある。代表委員会によるあいさつ運動の取り組みやボランティアさんによるあいさつ運動の効果は大きいものと感じる。ただ、数値にあるように、向上のため引き続き指導を続けていく必要はあると感じる。 - チャイム着席やマナー (高学年) 87.3％ (低学年) 83.1％ 低学年の低さが目に付く。やはり、時間を見て予め計画的に行動することの難しさは年齢的にもあるように考える。だからといって良しとするのではなく、根気よく指導・見守りを続けていく必要を感じる。 - 困っている友達を助ける (高学年) 93.3％ (低学年) 78.6％ 上項と同様、低学年の低さが目に付く。やはり年齢的にも周囲というよりまだまだ自分にしか目がいかない年齢である所は大きいと考える。しかしながら、低年齢時期からの道徳の学習の充実や様々な場面での人権教育の実践の効果が、高学年の数値に良い形で表れているのだと考える。 - 規則正しい生活 (高学年) 80.2％ (低学年) 82.1％ アンケートにおける関連する質問回答を見ると、「テレビ・ゲーム等の時間」2時間以上は、高学年で約45％、低学年で34％でかなりの時間を費やしている。また、就寝時間は、22時以降で見ると、高学年が約36％、低学年が17％である。家庭での生活事情は様々であると考え、各家庭に適正な生活習慣を呼びかけ、児童の健全な発育に向け協力を仰ぐ必要があると考える。 ②人権教育の推進 - 職員会議で子どもの様子を報告 ○毎月の職員会議で子どもたちの課題を共有することができた。 - 校内人権教育研修会, 年2回 ○自分の指導を見直したり、ほかの人の指導を参考にしたりすることができた。 - 児童アンケートで子どもたちの考えや思いを知った。 ▲「自分の気持ちを友達に言うことはできますか」の問いに対して、低学年では『あまりできない』と『できない』を合わせると35.2％になる。いじめアンケートでは、いじめがあったときやいじめを見たときに大人に伝えることができると答えている子がほとんどなので、自分の気持ちを誰かに伝えられないというわけではないと考えられる。 ○▲「困っている友達を助けることができますか」の問いに対して、高学年では約93％の子が『いつでもできる』『できる』と答えているが、低学年では、約79％である。低学年は助けたい気持ちがあっても、年齢的に助けられないと考える子がいると思われるので、妥当な数値かもしれない。 ▲「いじめはどんな理由があってもいけないと思いますか」という問いにたいして約14％の子が『理由によってはしかたないこともある』と答えている。 ▲「自分にはよい所がありますか」の問いに対して約25％の子が『どちらかというかない』『ない』と答えている。自己肯定感・自己有用感を高めるための取り組みをしているが、あまり効果が上がっていない。これまでの取り組みを継続すると共に新たな方策を考えていく必要がある。 ③ 特別支援教育の推進 ○「すずかっ子支援ファイル」を活用した、気になる子に係る支援方法をスクールカウンセラーの助言を受けながら担任等と話し合うことができた。あゆみ渡しでは、支援ファイルの見直しや学期毎のまとめをすることができた。 ④ 不登校対策 予防と早期対応 ○「鈴鹿市不登校対策初期対応マニュアル」とスクールライフサポーターの効果的な活用をすることができた。 ▲欠席30日以上: 8人, 10～30日未満: 9人という結果になり、10～30日未満は、昨年度と比べると減少したが、30日以上は、8人と人数が多い。スクールカウンセラーに相談するなど、多方面からの支援がさらに必要。 ⑤ 健康に関する取組 ○学校保健委員会は予定通り年3回実施している。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、縮小規模で行った。内容は本校児童の発育状態や健康状態、生活習慣や健康教育、さらに疾病の予防と管理などについて、学校三師から多くの助言をいただくことができた。また、感染症対策として、現行のやり方や今後の展望についてもお話をいただくことができ、それを日常の実践につなげることができた。今後も、学校保健委員会で討議された内容や市教委からの連絡等について、より多くの人に知ってもらうために、保健だより等の通信や児童保健委員会の活動を通して周知していく。	○長期欠席児童が思いの外多いと感じました。原因は様々だと思いますが、少しずつでも登校できるように専用の教室を用意する等の取り組みも有効なのではと思った。 ⑤ 健康に関する取組 ○学校保健委員会について。今年度は8月4日が新型コロナウイルスの影響で中止になったと思います。 ④ 不登校対策 予防と早期対応 ○現在、本校ではいじめを原因とする不登校児童はいないが、様々な要因により学校生活に適応できず、不登校傾向のある児童が複数いる。家庭と学校との連携を図り、必要に応じて、スクールカウンセラーやスクールライフサポーターにつなげる等、子に応じた支援ができるよう特別支援教育コーディネーターを中心とした組織的な体制づくりを進めていく。 ○長期欠席児童(,10～30日未満)は,昨年度と比べると減少したが,30日以上は,8人と人数が多い。生活習慣の乱れや発達障害等,理由は様々である。また,保健室登校をしている児童もいる。その児童の状況に応じた個別最適な支援を模索していきたい。スクールカウンセラー等,多方面からの支援をさらに強化し,不登校を未然に防ぐことができるようにしていく。 ⑤ 健康に関する取組 児童の健康に関する資料を作成し,保健だより等に掲載する等して,保護者や地域,学校関係者に児童の健康状態や課題について周知し,共有していけるようにする。	

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
3 家庭・地域 との連携	① 地域とともにある開かれた学校づくり ・総合的な学習の時間等において、キャリア教育とも関連させ、地域の方など外部人材を活用した取組を实践する → 年6回以上 ・地域づくり協議会と連動した学校運営協議会の開催 → 年6回 ・「学校だより」の発行とHPの更新 →たより:年12回以上、HP:月1回以上 → 保・地アンケート「学校は教育活動の公開や情報発信に努めている」97%以上 ・学校アンケートの実施と公表 → 年1回 ・地域の見守りのもとでの津波対応引き渡し避難訓練の実施 → 今年度は1回	① 地域とともにある開かれた学校づくり ○今年度大きく進んだ項で、年度初めにボランティア委員会を開催し、多くの方々に理解をいただき、60名あまりの参加が見られた。コロナ禍において、難しい運営であったものの、十分な意識付けがなされたと思う。 ○「マチコミ」を利用した情報提供もあり、日々の学校を生活を広く知っていただくことができていた。確実な伝達方法であり、今後ぜひとも続けてほしい。	① 地域とともにある開かれた学校づくり ○昨年度に引き続き、コロナ禍で地域とのさまざまな連携がとりにくい状況が続いているが、対策を講じた上で、できるところから再開していけるように取り組んでいきたい。 ○津波避難訓練は、校区の地形からも今後も続けていく必要がある。実施においては、地域とさらに連携していきたいと考えている。
	達成状況及び成果と課題	○「学校だより」は内容が一段と充実しており、小学校と関わりの少ない住民や地域との唯一の接点であり、まずは知っていただくことができていて、学校への理解へとつながっていくと思う。	○学校だよりをお読みいただいて、本当にありがたく思っている。今後も学校の様子をできる限りたくさん知っていただけるよう努力していく。
	① 地域とともにある開かれた学校づくり ・外部人材を活用した取組 学校合計 回以上（指標値年6回以上） ○昨年に引き続きコロナ禍のため、多くの取り組みが見送りになった。特に地域人材への依頼はまだまだ難しい状況が続いている。それでも感染が落ち着いた時期にいくつかの学年で地域人材を活用できた。また、定期的に来校している図書支援員やICT支援員の活用は昨年に比べてもより一層活用できた。 ・学校運営協議会の開催 全6回開催（指標値年6回） ○委員の入れ替わりもあり、新しい体制で進めることができた。 ・「学校だより」 10回発行（指標値12回以上） ○1回の内容が充実したものになっている。 ・HP更新61回以上（指標値月1回以上） ○指標値を大きく上回ることができた。 ・保・地アンケート「学校は教育活動の公開や情報発信に努めている」保92.5%地96.4%（指標値97%以上） ▲指標値には届かなかったが、90%以上の理解は得られている。 ・学校アンケート 年1回（指標値年1回） ○2学期末に実施。ペーパーレス化に切り替えた。 ・引き渡し避難訓練 1回（指標値1回） ▲児童アンケート「自分を守る力はあるか」低学年85.6%高学年74% 平均したら約8割の子どもに意識がついてきていることになるが、決して高い値ではない。3、4年生で防災についての取り組みを行ってきたことで意識の高まりを見せたと考えられる。愛宕という地域性のことも考慮し、今後も意識をして取り組みを進めていきたい。	○HP、学校だより等で開かれた学校ということが大いに感じる事ができた。 ○コロナ禍で情報が交錯するなか、いち早く新しい情報を発信していただけた。 ○「学校だより」の発行で、活動の様子がよくわかる。地域とのつながりを今まで通り大切にしていきたい。 ○学校HPは頻繁に更新されているので、よく拝見しています。保護者の中には学校HPの存在を知らない方もみえるかも。適宜、周知してもよいかもしれません。	○マチコミを導入したことで、紙面をカラーで送ることができ、また、より素早く保護者や地域の皆様に情報を伝えることができた。次年度も継続していきたいと考えている。

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
4 学び、働き やすい職場 環境	① 教職員の資質向上 学び続ける教師集団をめざす ・教職員向けに教職員用P Cの使用法の講習を実施 → 年3回 ・校内研修の充実 → 指導教諭による研修会の開催を年3回以上 ・ライフステージに応じた研修講座等への積極的な参加 → 一人2講座以上受講 ② 働き方改革の推進 総勤務時間の縮減に向けて ・行事や会議の精選と会議の進め方の工夫 → クロムブックを活用して、ペーパーレス化 ・定時退校日の設定 → 引き続き、月2回設定 退校職員90% ・放課後開催の会議を60分以内に終了 → 全会議の60% ・留守番電話対応の継続 ・月80時間を越える時間外労働者の年間延べ人数 0人（昨年度同様） ・月45時間を越える時間外労働者の年間延べ人数 0人（昨年度3人） ・時間外労働 → 昨年度比で、一人月当たり1時間削減（昨年度17.4h／人・月） ・年休取得 → 昨年度比で、一人年間1日増加（昨年度13.9日／人・年）	① 教職員の資質向上 学び続ける教師集団をめざす ○先生たちは授業・事務仕事等、多忙な中、研修会や自己啓発にも取り組んでいる姿が頼もしい。子どもたちのため、ご自身のためにも継続してほしい。（休むことも大切ですが。） ② 働き方改革の推進 総勤務時間の縮減に向けて ○働き方改革は、個々の持っているすべての「仕事」「作業」を棚卸し、解体したものを「精選ではなく“切る”」ことをしないと、本当の改革にはならない。そして個々人の持っているキャパシティの平準化をすることが大切になる。ただ、学校の仕事で「切る」ことはなかなか難しいとも考える。 ○コロナ禍でイレギュラーなことが多く、多岐にわたる目配り気配りが必要で、大変な苦労があったことと推察される。しかしいずれ「ウィズコロナ」という生活になることから、その都度その都度考えていかなくてはならないのでしょう。逆に「慣れ」から脱却できるのではないかと考える。「ブラッシュアップ」がまさにその通り。 ○来年度も新型コロナウィルスの不安が続くことと思います。登校を控える必要のある児童も、ICT機器を利用してリモート授業へ参加できるようにする等、ICT機器の活性・深化を強く望みます。 ○ペーパーレス化の取り組みはとても良いと思う。保護者への配布物もどんどんマチコミ活用をお願いします。ペーパーレス化により、作業時間や用紙枚数費用の削減実績が分かったとよいですね。	①教職員の資質向上・学び続ける教師集団をめざす ○研修長や指導教諭等による研修会や外部講師による授業、研修会を積極的に開く。 ○校内研究授業はもちろんのこと、自主的に授業を公開し、互いの授業や学級づくりを見合うような教師集団をめざす。 ② 働き方改革の推進 総勤務時間の縮減に向けて ○職員会議や保護者へのお便り等、いくつかの場面でペーパーレス化を進めることができたことは、働き方改革を進める上で、非常に有効であった。資料の印刷や綴じ作業がなくなり、業務の軽減につなげることができた。下校時刻表や学校からの配布物についても、その多くをマチコミメールでの添付ファイルとしたが、カラーで写真等を見ていただけることや、携帯端末でどこにいても読んでもいただけること等、利点が多い。今後は学級だより、会計報告、様々な連絡等など、ペーパーレス化できるものを模索し広げていきたい。 ○コロナ対応等、例年にない業務が入り、どうしても時間内に仕事を終わらせることが難しくなってきたのは事実である。しかし、それをそのまま受け入れていては、仕事量が増加するのみで、本来の業務である授業、教材研究、子どもたちへの指導がおろそかになってしまいかねない。学校運営協議会委員様からご指摘いただいたように、「切る」作業を取り入れることも考えていきたい。
	達成状況及び成果と課題		
	① 教職員の資質向上、学び続ける教師集団をめざす ○校内研究授業や外部講師による授業、講演、オンラインによる三重大附属小学校への研究会の参加、ICT活用実践交流等、授業力向上に向けた研修を行った。 ② 働き方改革の推進 総勤務時間の縮減に向けて ・行事や会議の精選と会議の進め方の工夫 ○コロナ禍のため、中止・削減を余儀なくされた行事が多いが、「見直し」の良い機会と捉えて行事の精選につなげることができた。 ○打ち合わせや職員会議をペーパーレス化へ切り替えていった。慣れない点も多々あるが、次第に定着してきている。以前は個人のデータに入っていたものも、共有化していくことで、よりスムーズにできると考える。 ・定時退校日 ▲月2回 81%（指標値90%） - 月2回の設定はできたが、なかなかコロナ対応の仕事が増えたことも一因と考える。 - 設定 → 引き続き、月2回設定 退校職員90% ・会議60分以内終了 70%（指標値60%） ○ペーパーレス化を進めたことが要因と考えられる。 ・留守番電話対応の継続 ○大変有効である。今後も継続する。 ・時間外労働 月80時間 0人（指標値0人） ・時間外労働 月45時間 1人（指標値0人） ・時間外労働 12月末：25.2h 年予想33.6h （指標値 昨年度17.4h／人・月） ▲リモート授業等コロナ対応が非常に多くなった。ICTの活用は非常に有効であると感じるが、導入間もないため、慣れないことが多く、暗中模索な面もある。そのため現段階ではどうしても仕事量が増えてしまっている。今後、扱いに慣れていくに従い、これらについては解消するのではないかと考える。 ・年休取得 12月末：8.6h 年予想11.5h （指標値 14.9日／人・年） ▲職場の環境としては「取りにくい」ということはない。むしろ「年休取得」に対しては十分理解のある職場の雰囲気であると感じる。年休取得がなかなか進まない原因としてはやはり仕事量の多さにあると考える。かなり思い切った行事の精選、学級経営や学校経営のブラッシュアップを行う必要がある。「子どものため」「今までやってきたから」「よい取り組みだから」といったことにとらわれることなく、本当に必要なことを大切にしていく意識が必要と考える。		

※ ○→達成できている， ▲→達成できなかった・課題が残った